

津波に耐えた石巻の土蔵

大島 幹雄

津波で家々が倒壊、流失し、その後大規模な火災に見舞われるなど、大きな被害を受けた宮城県石巻市の門脇地区で、その土蔵は残った。がれきの中、大地に踏み張るように立つ姿は、けなげでさえあった。

明治30(1897)年に建てられたこの土蔵を残そうと立ち上がった人たちがいた。補修修理のために必要な200万円を集める石巻震災土蔵メモリアル基金が6月にスタート。周囲にすっかりがれきもなくなつた土蔵の前で9月下旬、全国から約80人が参加して中間報告会が開かれ、目標を上回る290万円もの寄付金が集まったことが報告された。

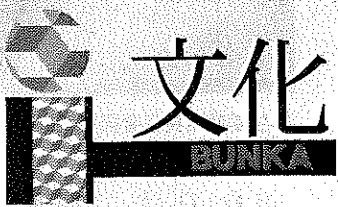
土蔵は江戸時代に回船業を営んでいた本間家の所有。救出された段ボール60箱分の資料の中には、当時の取引記録など約2千点の古文書も含まれていた。この土蔵は、港灣都市として栄えた石巻の歴史を見続けた建物ともいえるだろう。

しかし行政や国からなにも指定を受けていない歴史建造物を税金で修理することは不可能であり、所有者個人が修理費を負担するというのが、地震、津波で大きな被害を受け、生活する

震災シンボル、民間基金で残す

ここさえ困難な状況にあるとき、あまりにも過酷だ。ではどうしたらいいのか。資料の救出に当たった宮城歴史資料保全ネットワーク

代表平川新氏は、そのヒントが今回の土蔵保存運動にあるのではないかと指摘する。人々が長い時間を経て伝えてきた文書も建物も、いったん失われてしまえばもう復元はできない。だが、官に頼らなくても、未指定の文化財を基金で保存できる可能性が生まれた。民が知恵を出し合い、力を合わせることで、かく土蔵は残った。この意義は大きい。土蔵修理のアドバイザーに語り伝えることになった建築家佐藤敏宏氏は中間報告会で「土蔵は残るべくして残ったといえないか」と話していた。古建築を残し、風景を守りたい。それを社会全体で考えて



津波に進む市
宮城県石巻市
宮城歴史資料保全
ネットワーク提供

おおしま・みきお
953年
宮城県石巻市生まれ。著書に「虚業成れり」など。

